

平成24年(ワ)第49号外

意見陳述

2021年5月7日

佐賀地方裁判所民事部 御中

原告 片山純子

私は予備校で日本史を教えている片山純子と申します。本日は、意見陳述の機会をいただき、有り難うございます。

- 1 2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故の映像については、たまたま数日前から出かけていました海外旅行先のイタリアのテレビで、友人と一緒に見ました。ツアー一行には、福島県いわき市から家族で参加されていた方、被災地から参加していた新婚旅行カップル数組もいて、最初の一報が伝わったとき、旅を楽しむどころではないといった感じに、バス内の空気が一変したのを覚えています。日本に帰国したのが3月14日の朝、私は運良く成田発・福岡行きの飛行機に乗り換え帰宅できましたが、その日は、首都圏での計画停電が始まった最初の日で、成田までの電車は全面ストップし、埼玉在住の友人は、息子さんに車で迎えに来てもらって、夜遅くにやっと帰宅しました。私が福岡行きの飛行機に乗ってまもない午前11時過ぎに、福島第一原発3号機が爆発しました。帰宅後、ネットで見た黒煙を噴き上げた映像は、原爆が広島・長崎に投下されたときのキノコ雲を思い出させるもので、改めて原発の恐ろしさを感じました。
- 2 福島第一原発事故が起きるまで、夫も私も、原発については他人事であり、それほど深くは考えてはいませんでした。夫と私は1970年代後半(昭和50年代前半)に大学生生活を過ごしています。当時は、原発が日本各地でつくられた時期で、すでに反対運動は起きていました。1986年4月26日には、ソ連・チェルノブイリ原発事故が起きました。その2ヶ月前に私は出産し、母乳を飲ませる育児に追われていた最中であつたため、遠く離れた

地での原発事故としてしか認識していませんでした。1987年に夫の出身地である福岡市に引っ越してきました。予備校の職場でも、伊方原発裁判に奔走している人が何人もいましたが、原発の問題はたくさんある課題の一つといった認識しかなく、正面から取り組もうとは思いませんでした。しかし、福島第一原発事故は、壮年期を終え中年期に入った私たちにとって、アジア太平洋戦争の敗戦を「第1の敗戦」とするのであれば、「第2の敗戦」ともいえる衝撃的なものでした。気がついてみれば、地震が多発し多くの活火山のある狭い国土の日本列島に、50数基の原発が建っていたのです。しかも、事故後のありさまを見る限り、安全・安心な避難計画などないと実感しました。それなのに、私たちは、政府・官界、財界、マスコミ、学者・専門家のいう「安全・安心だという神話の世界」にどっぷり漬かっていたのです。

- 3 夫と私の原発に反対する理由は、単純です。地震・火山の多い日本列島は、地盤が不安定です。地震や地震による津波で、海岸線近くに多く建設された原発は被害を受ける可能性が高いと思います。さらに、危険な核物質を扱っていながら、テロ対策は不十分です。また、ユーラシア大陸のように地盤が強固でないため、地下深くに使用済みの核物質を保管することもできません。このような日本列島に、原発を建設・稼働すべきではないというのが、反対の理由です。しかも、原発は、核兵器の技術を転用するなかで建設・稼働がはじまりました。長崎に投下された原爆はプルトニウムを使用しています。原発は、このプルトニウムを生産する役割も担っています。実際、日本は現在約46トンのプルトニウムを所有しており、それは、約6000発分に相当するそうです。私たちの生活に必要な電気を手に入れるためだけであれば、太陽光・風力・地熱発電など、施設費も安い、外国から資源を輸入することなく自給できる、核ゴミも発生させないなど、南北に長い日本列島で折々の自然を楽しむことができる島国だからこそ、手に入れられるものが一杯あります。たしかに、自然エネルギーによる発電技術は、発達の上途にあり、10年前の福島第一原発事故当時は不十分だったかもしれませんが、しかし、現在は長足の進歩をとげ、ヨーロッパでは、自然エネルギーの割合が大きく伸びています。オーストリア（約80%）・デンマーク（約76%）・スウェーデン（約68%）と高く、イタリア・ドイツ・イギリス・スペインにおいても40%以上に達しているそうです。九電など、日本の旧電力会社は、自然エネルギーは需給バランスの調整が難しいとよく言いますが、すでに

自然エネルギー中心に電力供給を行っている上記のような国々があるのですから、それらの国々にならって、蓄電・需給バランスの方法などを学ぶことは可能だと思います。

- 4 福島第一原発事故の直後から、私は、情報集めを必死にしました。様々な情報をわかりやすく調べることができるよう、2016年からは、数人の仲間とともに「原発なくす蔵」といったサイトも立ち上げました。今でも、一部記事を更新し、情報把握・発信に努めています。夫の場合は、2013年に57歳で急逝しましたが、福島第一原発事故の後、すでに障がい悪化のため電動車イス生活をしていたにも関わらず、福岡市内で反原発・脱原発の集会やデモがあると、しんどい身体を動かして、私とともに何度も参加しました。友人たちもサポートしてくれました。私は、2019年4月より「市民連合ふくおか」事務局長としても活動していますが、それは、野党共闘で政権交代を実現し、原発ゼロ法案成立や原発なしの気候危機対策を早くに進めて欲しいと思ってのことでもあります。
- 5 現在、福島県では、子どもの甲状腺ガンが200人以上確認されています。専門家の一部には原発事故とは関係ないという方々がありますが、「小児100万人に1人～2人」と言われたものが多発しているのです。原発事故との関係を疑うのは当然です。しかも、命に関わる癌です。私たちの娘も、20歳代半ばに、癌を診断され手術を受けました。幸い再発することもなく元気に暮らしていますが、若い年代の癌であったため、亡くなった夫とともに、転移がないかどうか、進行の早さを心配しました。まして、小児甲状腺ガンは、もっと幼い子どもたちが罹患しているのです。親御さんの心痛はいかばかりかと思います。それなのに、原発事故との関係を疑うこともままならない、子どもたちの将来を思ったとき事故を起こした東電に賠償を求めたいと思っても認められない、目の前では子どもが癌で苦しんでいる、治療費はいくらあっても足りない・・・癌で苦しむ子どもやその親御さんが、癌だけでなく世間のまなざしにも苦しまなければならないとは、なんて理不尽なのでしょう。
- 6 原発事故は、大地を放射性物質で汚染します。自然災害であれば、復旧・復興は年単位で可能なものがほとんどだと思います。でも、放射性物質で汚染された大地は、元に戻るまでに数百年・数千年、もっと長くかかる可能性もあります。

原発事故は、人々から故郷を奪います。農業・牧畜、漁業など第1次産業で生活してい

た人々の生業を根こそぎ壊します。日々の生活を一変させます。家族のあり方も変えてしまいます。

原発事故の処理の過程で発生した汚染水には、トリチウムなど放射性物質を含みます。薄めても放射性物質を海洋投棄することには変わりません。放射性物質は厳重管理を行うことが大原則です。危険性が指摘されていた汚悪水の排出をやめず、その結果、被害を発生・拡大させた水俣病の悲劇を忘れてはいけません。

九電など、原発をもつ電力会社は、こうしたことを正面から引き受ける「覚悟」をもって稼働しているのでしょうか。そうでないなら、原発を動かすことなどやめて欲しいと思います。

裁判官の皆さまにも、お願いします。仮に原発の稼働を認めるのであれば、同様な「覚悟」をもって御判断いただきたいと思います。

本日は、有り難うございました。

以上